

緊迫感を呼ぶ多彩な論議

日本文化フォーラム編

シンポジウム 中国問題と日本の選択

E 今週の日本
S 47.2.6号

本書は、昨年八月に日本文化フォーラムが主催したシンポジウムの記録である。この種の記録を本にした場合、ともすると中身の薄い、ありきたりのものになりがちだが、本書はちがう。

それは第一に、中国問題を中国国内の諸問題や日中関係のみならず流動化する広い国際社

たとえば、第一討議・アジアをめぐる国際情勢では、花井氏の「アジアのなかの四極構造」という興味深いレポートがあり、花井氏は中国がニクソン訪中を受諾した意図を米ソ両極体制打破、対日牽制、対ソ牽制、台湾問題での米中交渉というように、この時点でこのように明確に論じきっている。そしてこうしたレポートをめぐってアジアの国際政治を三極構造ととらえるのか、四極構造とみるのか、軍事的三極下の四極とみるか等々の議論が展開されている。

第二討議・中国の対外政策では柴田穂氏が「ニクソン訪中後の対外政策」を、とくに六九年秋以降の中国外交の変化のプロセスをふまえて問題提起している。米中接近のイニシアティブは周恩来がとったとする氏と、毛沢東であろうという他の諸氏との意見のくいちがいが目立つが、たとえばエドガー・スノウの毛沢東会見記などについては、非専門家の佐伯彰一氏がこのシンポジウムで発言しているように、「発表されたこととは、ある意味では、対外的なキャンペーンとして受け取るべき」という見方も必要ではなからうか。

このように本書は、いろいろな見方が多彩に出ていて読者の興味を十分にそそるであろう。紙幅がなく全内容に言及できないが、ほかには三好修「国運と台湾問題のゆくえ」、前田寿夫「中国经济の実情」、石川忠雄「日中関係の展望」、花井等「米中接近の背景と日本の立場」というレポートがあった。

(自由社・七六〇円)

▲東京外語大助教授・中嶋 雄

会全体のなかでとらえようとしているからであり、第二には、ニクソン訪中決定直後という時期のシンポジウムであるだけにあって、参加者がかなりの「緊迫感」をもって論じていることと、第三には、メンバーが多彩であって、その効果があがって

シンポジウムであらう。